

本日
大辭典

言
泉

行幸高陽院應製和歌序

善滋爲政

言葉のはやしも、老木になりて、花のおもひも、わすれにたり。ことばの泉、あさくなりゆけば、人なみならぬ水くきを、あはれとおぼして、あらたまの年たちかへる、春のためしにもらされず、かずまへさせ給へと、しかまうす。

いにしへ人は、ことばのひろきこそを、海にたゞへたり。實に、その海よりいはむには、ここにをさめたることばもは、谷間がくれの泉にこそならざらむ。あはれ、この泉よ、底いさ浅くして、今は、くみ見る人もあらざらめぎ、岩にふれ、落葉にむせびながれながれて、なほ、たえざらむには、遂には、川となり、江となり、また、かのひろき海ともならむか。この書を、ことばの泉と名づけたる、その意、全く、ここにあり。明治三十一年六月二十七日、螢さびかふ夜、牕の下にて、落合直文しるす。

序

落合氏が始めて本書を上梓したのは、今から二十三年も前の事で、その間、本書が學界に貢獻したことは多大であつたが、時代の變遷、随つて國語の變遷も亦著しいことであつた。明治四十一年には、『補遺』が加へられたが、それから亦既に十餘年を経過した。そこで、今度は私が大體監修を引受けて、再び増訂を試みたのである。

辭書のやうな骨の折れた著述は成るべく原著者の名を何時までも保存して、さうしてだんだんに後の人が増補し、完成して行くが至當である。米國のウェブスタアも多くの學者が斷えず補正して版を改めつゝ、ウェブスタア辭書として知られて居るのである。落合氏の言泉は何時までも落合氏の言泉であらねばならぬ。他に種々の辭書が出来ても、明治三十一年に出来上つた言泉は、國語の變遷と共に折々改修せられ

て永遠に言泉として傳はるべきものである。この意味から、今回は『補遺』の部も併せ、尙幾多の増補をなし、しかも原書の體裁方針等はなるべく失はぬやうに務めたのである。補助者の内には、明治三十一年の言泉編纂に従事して多くの經驗を有する水田恭太郎・波多野鏐治郎・與謝野寛の三氏もあり、大川茂雄・鈴木行三・桑野禮之助・中沼胖・田中謙藏の諸氏がある。私が最初の中は、原稿のみならず、組み上つた校正も一々目を通してたのであつたが、去年の夏眼を患つてからは、折々編輯所に行つて種々の疑義の解決、その他の相談に關つたのである。今や本書を刊行するまでに運んだのは、編輯員諸君の勉強にも因るが、勞銀や紙價の暴騰を物ともせず、一意此の事業に熱誠をこめた書肆の勞苦も、亦大いに多としなければならぬ。

大正十年十一月

文學博士 芳賀矢一

しるす。

序

亡友落合直文ぬしが、此の書を編纂し給ひしより、はや十年となりぬ。初め編纂し給ひつるとき、の用心は、緒言あり、凡例ありて、つばらゐしるし置かれぬれば、いまさら言新しく言はむは、徒事なるべし。然はあれど、こゝその大旨を約めて言はむゝ、おほよそ二條ありきと覺ゆ。餘りゝ巻帙を浩瀚ならしめずして、つゝめて多く言語を收めむとし給ひしが、その一なりしは、うつなし。さて用ゐむ人の別ゝ辭書を備へずして、ただ此のこゝばの泉ゝのみ頼りて、事足りぬべきことを謀り給ひしや、その二なりしならむ。故いかまといふゝ、予あるとき落合ぬしゝ、グリンムの獨逸大辭書の事を物語りしゝ、我が國ゝさる書の無きこそ歎はしけれ、いかでこの國ゝありこある言語の限を集めて、日本大辭書を作りてしがなと、つぶやき給ひしこゝありき。言泉を編纂し給ひしは、それより年經て

後の事なれば、落合ぬしは一面よりはさる大事業の急は成就せらるべきはあらざるをたもひ給ひ、一面よりは又餘りは大なる書の用ぬるは便よからぬを慮り給ひてこそ、言泉の體裁のたほよそをば、定め給ひしならめ。又普通の辭書のあらでかなはぬと共に、外國はいふ會話辭書やうのもの、術語辭書のくさぐさを作ることの、極めて緊要なるべきをば、予落合ぬしとしばしば語りかはししことありて、落合ぬしも、これ等特殊の目的ある辭書を、普通の辭書と併せ編まむことの、望ましき業ならぬを諾ひ給へりしは、この書にては、凡例にも見えたる如く、初め方言の辭書、地名、人名の辭書とやうは、ひとつづつは作り終へ給ひしを、後、ここごとく合同し給ひしは、用ぬむ人の辭書ただ一つ持ちて事足りぬべき便宜を、慮り給ひしは外ならじとぞおもはるる。されば落合ぬしの用心よりは、理想をば理想として、しばらく措き、書の大よせじ、人の備ふべき書の數

を多からしめじの親切は本づきたる、そこばくの讓歩ありつ
るならむか。言泉の始て世は公とせられしより、今第二十三
版を發行するは至るまでの、十年の間は、世のさまたく變
りぬ。辭書を用ゐる人の願ふところも、いかでかは昔は異な
らざらむ。かの大辭書の事は、世いかは進みても、ひとびと皆
備ふべきものならねば、言はでもありぬべし。此の書は年ご
ろ版を改むるは従ひて、増し補ひつる言語のかず甚だ多きは、
編纂の事はあづかりし人等、つねは巧は容積のいちじろく加
はることを避け得つる、これはた誰ひとも、今むかしを通じて、
喜び見るところならむ。ここにただ一つ言はまほしき事こ
そあれ。それは彼の固有名詞を普通語と合同して編める體裁
の、今の世はなりては、既は辭書を用ゐる人の多數の望は副は
ざるべきことなり。今より後、又版を改めむとき、時の宜しき
を計りて、いはゆる會話辭書めきたる方の言語を選び分け、別

は一卷として添へなば、いかゞ。好き折なれば、予が心も
ふまゝを打出でて、後の編纂の事はあづかるべき人等も、告げ
知らするゝなむ。

明治四十一年九月のはじめ、

森林太郎しるす。

緒言

辭書編纂は、余のはやくよりの志なり。明治廿一年のころ、有志者あつまりて、言語取調所を起ししが、余も、その設立者の一人となり、よろこびて、それに従事せしに、いくばくもなくして、かの取調所は、帝國大學のかたにうつされたり。されど、余は、余の志をつらぬかむこて、常に、言語の採集を怠らざりしが、明治廿七年の秋には、その草稿三十餘卷になれり。これ辭書の基となりしものなり。

この辭書編纂員をあつめて、従事するこになしたるは、實に廿七年の九月一日のこなりけり。午前は、解釋に従事し、午後は、言語の採集に従事せり。その採集は、新聞雜誌をよむもの、謠曲戲曲をよむもの、小説をよむもの、軍記をよむもの、俳書をよむものなど、各、その分擔を定めて従事せり。こは鎌倉時代以前の書籍中なる言語は、大かた、採集し終へたれど、その以下のものは、極めて、不完全なりしがためなり。かくて、一週間に一日、各辭書の批評會をはじめ、又編纂せむとする辭書の方法、および體裁を議したり。この書の方法、および體裁は大かた、その議の結果なり。編纂は、廿九年の秋、大かた終へたり。その秋、出版せむこて、廣告までせし

が、をりしも藤井乙男、草野清民二君の帝國大辭典、大和田建樹君の日本大辭典など、一時に出で來れり。かかる時、しひて、世に出さむには、それらと競争するが如き嫌ありしかば、殊更に延期するここなせり。かくてその延期後、一層、言語の選擇に心をこらし、徐徐として、今日の完成を見るにいたれり。思へば、かの延期は、この書のためには、なかなか、幸福なりともいふべかりしならむ。

この書、編纂のために、一大繁多を來したるは、日清戦争の一事なり。かの戦争起り、臺灣、わが領土となりしより、種種の新しき言語の出で來れるは、千を以て數ふるも、數へつくしがたし。兵站部といふ語をきけば、そを取らざるべからず。戦利品といふ語を見れば、また、そをいれざるべからず。もり、そんざんといふ山をいるや、やがて、又新高山といふ名も出でたり。しかのみならず、既に解釋し終へたる語も、更に解釋せざるべからざる。ここ多く、日本といふ詞の下の解釋までも、更に書きかへざるべからざるに至れるなど、このために、大に、時日を費せり。

この書は、池邊義象君、畠山健君と、余との合著になさむと思ひて、當初、二君にもそのことを告げたりしが、編纂の常として、萬事、獨見にて、斷行せ

ざる時は、中途に、種種の議論起りて、その體裁を一定ならしむること能はざるが故に、遂に、合著のことは、見合せて、専ら、余、一人の責任となせり。されど、二君には、なにくれど、一方ならざる助力を與へられ、ここに、畠山君の如きは、ある一部を擔當せられて、たえず、めづらしき語などをおくられたり。又、今泉定介君は、かねて、辭書編纂の志ありて、既に、編纂し終へられたるもの數冊ありしが、余がこの事業を贊し、悉く、そを、余におくられたり。又、赤堀又次郎君は、余と共に、かの言語取調所に従事せられしが、そのをり、畫引の必要なることを發議せられたり。この書の後につけたる畫引は、全く、君の考案なり。又田口孝太郎君、久保猪之吉君は、その専門の學科に關する語を全く、擔當せられ、大に助力せられたり。いづれも、この書のためには、恩ある人人なり。ここにしるして、その厚情を謝す。

編纂員は、前後おなじからず。前には、山本信哉君、石川岩吉君、古谷知新君、白鳥菊治君、中ごろは與謝野寛君、白河基廣君、白鳥菊治君、波多野鏢治郎君、吉小神鎗君、近藤潔君、堀江秀雄君、高垣虎吉君、水田恭太郎君、後に、吉小神鎗吉君、波多野鏢治郎君、水田恭太郎君、専ら従事せられたり。この書の、かく完成するにいたれるは、皆、この人人の苦心の餘に出でたるもの

にて、その熱心と、勤勉とは、余の、永く忘るること能はざるものなり。

明治三十一年六月廿五日

落合直文識

凡 例

(一) 採録の範圍

- 一、本書に採録せる語彙は、普通語・古語・方言の外、専門語の普通に用ひらるるもの、その他一般の固有名詞（人名・地名・姓名・神社・佛閣・山陵・神佛の年號・名數・書名）及び歴史・文學に有名なる故事・詩文の題目・雅樂・戲曲・謠曲等の曲目等に互ひ、範圍極めて廣し。
- 二、人名のうち、天皇は諡號、皇后・女御・親王・皇子は御名を並び、學者・文人・美術家・茶人などは、多くは姓と號とを挙げ、俳優・力士などの藝人は、藝名を以て挙げたり。その他、通稱・號・異名などにて世に知られたるものは、搜索に便せんがために、各これを挙げたり。
- 三、書名は、我が國典を主に採りたれども、漢書にて普通に知られたるものは、亦之を採録せり。
- 四、一書にて二つ以上の名あるものは、いづれも之を舉げて、對照に便ならしめたり。例へば金槐集・鎌倉右大臣集・源右府集は各條に舉げて、金槐集の下にその解釋を施したるが如し。
- 五、異名同義の語二つ以上ある場合に於ても、すべて之を列舉し、現時最も汎く行はるる語の下に、その釋

義を施したり。

(二) 排列の順序

- 一、排列は五十音順に依り、也行のい・えと和行のうとは、阿行のい・う・えと分たず、共に阿行に出だせり。
- 二、撥音んは、むの次に列ね、促音はつと見做して、常のつの次に列ねたり。但しつは小字にて、右傍に片寄せ、普通のつと紛れざらしめたり。
- 三、ば・び・ぶ・べ・ぼが純然たる清音にして、これを半濁音と呼ぶことの誤れるは、聲音學上疑ふべからざることなれども、字形を標準とするも亦一の便法なるべきを以て、今暫く舊に依りて、これをはひ・ふ・へ・ほ・び・ぶ・べ・ぼ・べ・ぼの順序に排列しあけり。
- 四、西洋語源の語は、その長音に於て、あるこゝるびーる等の如く長音符「ー」を用ひず、あるこおるびいる等の記法によれり。
- 五、語源よりいへば、同一の語なりとも、初より異なる漢字を充當して使用せるものは、別語として標出し、語源欄に於て、その旨をことわりあきたるもの多し。例へばあかし（燈）とあかし（證）と、うら（裏）とうら（心）と、又つく（突く）とつく（築く）と、とし（利し）ととし（疾し）との類。

六、成句は、その句中に含まれたる主なる語の下に解釋せり。いづれの語を主なるものとして檢出すべきか紛はしき場合、もしくは成句なりや語なりやの判別に苦しむ種類のもは、別に成句の全形を五十音順の相當の箇所に標出せり。

(三) 解釋の方法

一、各種の解釋の次第は、左の如し。

(ア) 充用せる漢字、例へば、**やま**に對して**山**、**はぎ**に對して**萩**、**胡枝子**と書し、外國語の發音に充てたる通用漢字、例へば**せめんし**いなに對しても、**攝綿支奈**又は**施綿支那**と記せり。

(イ) 外國語の場合には、その原語、例へば**てえぶる**に對して**(英 Table) びるしやな**に對して**(梵 Vairacana)**と書し、又外國語と國語とより成りたる熟語にて、その外國語の部分に充當すべき漢字なき場合には、片假字を用ひたり。例へば**ああむす**と**ろんぐ**はうに對して**アアム****ストロング**砲と記せるが如し。

(ウ) 品詞の種類、又その語尾の變化、自動他動の區別は、ゴチック體活字を用ひたり。その例は、四(二)より五までに記せるが如し。

(エ) 固有名詞・専門語・動植物・礦物等の區分所屬の標目は下の如くに記せり。例へば**〔人〕****〔地〕****〔書〕****〔理〕****〔化〕****〔數〕****〔哲〕**の類

(オ) 符の中には、主として語源、充用漢字の正誤、發音上の注意等、又見出しの語が外國語の譯語なる場合には、その原語等を記せり。

(カ) 釋義の多岐に互れるものは白字の**㊦****㊧**等にて區別し、又釋義中、他の語の一項を借れるものには、黒字の**㊨****㊩**等を用ひたり。

(キ) 釋義の多岐に互れる場合、その一部に對してのみ充用せらるる漢字は、その部分の解釋の次に括弧「」内に記せり。

(ク) 對照又は反對の意義を有する語は、その由を記し、又他語の釋義を參照するを便とする場合にも、その由を記せり。

(ケ) 出典用例は括弧「」内に記し、又その語句を中略したる場合には點線……を用ひたり。

(コ) 枕詞の意義は一にして、種類の語にかかるもの、例へば**梓弓**の**ひく**にも**いる**にもかかる類は、一括して用例を掲げ、その意義の同じからぬもの、例へば**しながどりのゐな**にも**あは**にもかかる類は**㊪**

②の符號を用ひて、別別に解釋せり。

二、古事記萬葉集菅家萬葉集延喜式の祝詞・六國史中の詔勅等は、讀み易からしめんがために、假名がきに改めたり。

三、古書の引用文にして、假名の亂れたる時代に屬するものは、その誤を改め正せり。

四、未來の助動詞は、上代の引用文にはむと記し、平安時代以後のにはんと記せり。

(四) 目標略語

一、語源もしくは釋義のうちに約略・延轉などあるは、約言・略言・延音・轉音の意なり。

二、品詞の種類及び語尾の變化等につきては、左の符號を用ひたり。

名詞……………	【名】	代名詞……………	【代】
數詞……………	【數】	副詞……………	【副】
接續詞……………	【接】	感歎詞……………	【感】
貌詞……………	【貌】	動詞……………	【動】
形容詞久活……………	【形一】	形容詞志久活……………	【形二】
自動詞……………	【自】	他動詞……………	【他】
四段活……………	【四】	上一段活……………	【上一】

下一段活……………【下一】

上二段活……………【上一】

下二段活……………【下二】

加行變格活……………【加變】

佐行變格活……………【佐變】

奈行變格活……………【奈變】

良行變格活……………【良變】

助動詞……………【助動】

助辭……………【助】

助數詞……………【助數】

接頭語……………【接頭】

接尾語……………【接尾】

枕詞……………【枕】

句……………【句】

三、動詞は必ずその語尾變化と自他の別とを連ね示したり。即ち動四自とあるは、動詞にして四段活に變化し、その性・自動詞なりとの意なる類。

四、動詞・形容詞・助動詞は、文語に於ける終止言の形を挙げたり。ある一段に限りて用ひられたるもの、例へばけ消えの約・つて傳への約・のたまはく宜ふの延の如きは、動とのみ記して、語尾變化を表示せざりき。

五、形容詞中、方言俚語等に屬する者は、口語の終止形にて挙げたり。この場合、その語尾變化の一・二を區別するは必要なが故に、形とのみ記せり。

六、固有名詞・専門語・動植物・礦物等の區分・所屬の標目に關しては、次のごとくに定めたり。

人名……………	【人】	書名……………	【書】
礦物學又は礦物の名……………	【礦】		

動物學又は動物の名……………〔動〕

植物學又は植物の名……………〔植〕

動物植物兩學に共通の語……………〔生〕

生理學醫學又は特殊の病名……………〔醫〕

物理學……………〔理〕化學……………〔化〕

哲學〔純正哲學の外、心理學、論理學、倫理學、教育學、

美學等の諸學をも含む〕……………〔哲〕

數學……………〔數〕天文學……………〔天〕

地學地名……………〔地〕法律……………〔法〕

經濟學……………〔經〕文學修辭……………〔文〕

語學……………〔語〕美術……………〔美〕

音樂……………〔音〕建築……………〔建〕

商業……………〔商〕農業……………〔農〕

兵學・兵事……………〔兵〕佛教……………〔佛〕

キリスト教……………〔基〕

七、出典に用ひし書名は、簡略を期して、全部を標出せ

ざるもの、尠からず、その一斑を擧ぐれば左の如し。

記 古事記 紀 日本書紀

紀 紀 日本紀 日本紀 續日本紀 續日本紀

續後紀 續日本後紀 祝詞 祝詞式

古拾 古語拾遺 竹取 竹取物語

土佐 土佐日記 伊勢 伊勢物語

和名 和名類聚鈔 空穗 空穗物語

落窪 落窪物語 枕 枕草紙

源氏 源氏物語 取替 とりかへばや物語

狹衣 狹衣物語 濱松 濱松中納言物語

大和 大和物語 榮花 榮花物語

蜻蛉 蜻蛉日記 更科 更科日記

今昔 今昔物語 海道記 長明海道記

十六夜 十六夜日記 宇治 宇治拾遺

方丈 方丈記 十訓 十訓抄

著聞 古今著聞集 保元 保元物語

平治 平治物語 平家 平家物語

長門平家 長門本平家物語 盛衰記 源平盛衰記

正統記 神皇正統記 曾我 曾我物語

徒然 徒然草 萬葉 萬葉集

古今 古今和歌集 後撰 後撰和歌集

拾遺 拾遺和歌集 後拾遺 後拾遺和歌集

金葉 金葉和歌集 詞花 詞花和歌集

千載 千載和歌集 新古今 新古今和歌集

新勅撰 新勅撰和歌集 續後撰 續後撰和歌集

續古今 續古今和歌集 續拾遺 續拾遺和歌集

新後撰	新後撰和歌集	玉葉	玉葉和歌集
續千載	續千載和歌集	續後拾遺	續後拾遺和歌集
風雅	風雅和歌集	新千載	新千載和歌集
新拾遺	新拾遺和歌集	新後拾遺	新後拾遺和歌集
新續古今	新續古今和歌集	六帖	古今六帖
現六	現存六帖	赤染集	赤染右衛門集
伊勢集	伊勢大輔集	長秋	長秋詠草
天德歌合	天德内裡歌合	新六	新撰六帖
壬二集	壬生二品集	散木	散木弃歌集
拾愚	拾遺愚草	拾玉	拾玉集
山家	山家集	三職人歌合	三番職人盡歌合
三職人歌合	三番職人盡歌合	右京大夫集	建禮門院右京大夫集
堀太	堀河太郎百首	堀次	堀河次郎百首
夫木	夫木和歌抄	萬代	萬代集
七職人歌合	七番職人盡歌合	諸國獨吟集	宗祇諸國獨吟集
吳竹集	和歌吳竹集	朗詠	和漢朗詠集
名義抄	類聚名義抄	字鏡	新撰字鏡
禁祕鈔	禁祕御鈔	辨要抄	了俊辨要抄
雅裝抄	雅亮裝束抄	康富記	中原康富記
一代男	好色一代男	五人女	好色五人女
一代女	好色一代女	二代男	好色二代男

三代男	好色三代男	若風俗	本朝若風俗
胸算用	世間胸算用	戀飛脚	傾城戀飛脚
太功記	繪本太功記	四谷怪談	東海道四谷怪談
兜軍記	壇浦兜軍記	嫩軍記	一谷嫩軍記
道中雙六	伊賀越道中雙六	近江源氏	近江源氏先陣館
膝栗毛	東海道膝栗毛	河原の達引	近頃河原の達引
重帷子	槍の權三重帷子	御所櫻	御所櫻堀河夜討
今國姓爺	唐船嘶今國姓爺	阿波鳴門	傾城阿波鳴門
妹脊門松	染模様妹脊門松	先代萩	伽羅先代萩
手習鑑	菅原傳授手習鑑	千兩轅	關取千兩轅
八、神樂歌催馬樂歌・謠曲・狂言記・宴曲・俗曲等は、			
神樂歌(あかぼし)	催馬樂(席田)		
宴曲(春)	俗曲(越後獅子)		
謠曲(鉢の木)	狂言(梯山伏)		
の如く、その曲の題目をも括弧内に記入し、俳句は特に著名なる作家の手に成れるものは、俳號のみを記したれど、その他は、			
毛吹草(好香)	犬子集(宗二)		
曠野集(湍水)	俳諧古選(一笑)		
猿蓑(如行)	炭俵(岱水)		
等のごとく、書名を記し、括弧内に作者の名をも併せ			

記せり。

九、同名の書他にもありて紛はしきは、特に著者の姓名を冠らせて、區別したること、例へば
貝原益軒、大和めぐり 橘南谿、西遊記
などのごとし。